

## シャワーズ賞（優秀賞）

### 山の水にはかみさんがいる

新潟県 上越教育大学附属中学校 三年 井口 慶香

「山の水にはね、かみさんがいるんだよ。」

祖母は私にそう言った。ちょうど私が五歳の時だ。「かみさん」とは「神様」のことだ。方言というほどのものではないが、祖母の周りの人たちは、一様にこの表現を使う。何だかゾクゾクするような緊張感漂う表現だ。幼い私でさえも、畏れのような、憧憬の念とでもいうような、不思議な感情に包まれた。

山の水にはかみさんがいる。そう語る祖母の手には、小さなサワガニがそっと握られていた。愛らしい姿とは対照的に、こちらをギロリと見る様子は、喻えようのない凜々しさがある。赤黒い甲羅があんなにもキラキラと太陽光を反射させるのは、山の水を纏っていたからなのか。触れてはならぬもののような気がして、私は急いでそれを水の中に還した。サワガニは逃げるそぶりすら見せず、そして、水の冷たさをもものともせず、ただ悠然と山の水の中に佇んでいた。

働き者の祖母の手は、岩のようにごつごつとしながらも、つやつやと光っている。山菜の灰汁で黒ずんだ指先はデッサンしたようにしわの陰影を際立たせる。祖母は長年、中山間地の棚田を、祖父と一緒に守ってきた。農業へのAI導入が取り上げられ、機械化が当たり前になったとはいえ、棚田での稲作は、平地の稲作の何十倍もの苦労があるという。効率性重視の大きな機械は、細いあぜ道には厄介な問題にもなるらしい。棚田の美しさを守るため、入念な畦塗りや真夏の草刈りは欠かせない。日本の原風景という棚田だが、その景観維持がどれだけ難儀かなど、思いを馳せられる人はどれくらいいるだろう。

私が暮らす地域は、大雪にてんてこ舞いになる冬を経て、雪解けを迎え、太陽の季節に辿り着く。誰もが冬を忘れる頃、溪流は溢れんばかりの勢いを増し、棚田を潤す。一番上の田に引き入れた水はじつくりと、一番下の田まで優しく覆う。青々とした稲が風になびく棚田の姿は素敵

だ。また、刈り入れ前の黄金色に輝く稲穂もまた素晴らしい。それでもやはり、私が好きなのは、田植え前、たつぷりと水が張られた、あの静寂漂う棚田の姿だ。新緑の季節、水面に空を映した緑のダムは、やがて、街を透り大地に染み渡る水となる。

山の水にはかみさんがいる。迷信のような非科学的な言葉に、真实性を感じるのは、そこに生きてきた祖母が語る言葉だからだ。祖母は山の水の偉大さを、生活の中で実感し、自然のすぐ傍に自分の日常を置いていた。洗顔や入浴、飲水など、私の生活にも、水は大きく関わっている。融雪で大量の水を使い、プールや温泉などのレジャーにもなくてはならないものである。私の周りには、活用する水であり、便利な水である。私に見えていたのは、「生活のための水」であり、自分たちが「生きるための水」の姿である。

しかし、祖母には、私の捉えとは確実に異なる、根源的な水の姿が見えている。それは地球の拍動を支える水である。もし、これが真実だとしたら、水の変化は地球の姿を変え、水の枯渇は地球の鼓動を止めるかもしれない。

山の水は、微妙なバランスの上にあるのだと思う。川の源である山の水が枯渇すれば、大きな問題を引き起こし、下流域に住む多くの人々の生活に影響を与えるかもしれない。山の様子が変われば、きっと何か大きな変化が起こるだろう。自分の生活の中だけの、自分だけの問題にせず、目の前にある自然にしっかりと向き合うことが大切なのだと思う。

山の水には、確かに、かみさんがいる。

ある時言った祖母の言葉が、今でも私の耳から離れない。

「サワガニ、また見せてあげたいんだけど、随分といなくなっちゃってね。なんか、山の水、おかしくなってきたら。かみさん、おこつてるんだらうかねえ。」